



もしゆれ <もしもいまここで大地震の揺れに見舞われたら ワタシはどうなる?> 地震災害を自分のコトとしてイメージできるアプリ



社会防災システム研究領域 災害リスク研究ユニット研究員 東 宏樹

なぜ自助は進まないのか

防災科研は「災害に強い社会の実現」というミッションを掲げています。もしゆれは、自助・共助・公助という基本に立ち戻って考えたとき、基本となる自助についての一人称のアプリです。巨大自然災害に人類社会が効果的に備えるためにすべきことはたくさんありますが、第一に自助-自らの命を守れない人は人の命を守れません。市民の一人ひとりが、行政の力や誰かの助けを待つ前に、取り組むべきは自助であるはずですが。しかし実際にはご承知の通り自助の取り組みは驚くほど進んでいないのが現状です。

モバイル・位置情報・AR×防災

私はもともと情報技術の人間で、学生時代はモバイル・位置情報・ARについて取り組んでいました。インターネット空間の情報を日常や実空間に埋め込み、生活と一体化した新しいインフラとなることを目された情報技術の分野です。これらは、「普段は意識しないけれども実はその場所が持っている情報」等と極めて相性が良い技術であることが分かっていたのですが、そういう情報が何の役に立つのか分からなかったこともあり、技術自体は比較的古くからあるにも関わらず、なかなか日の目を見ませんでした。つまり、人や社会の役に立つコンテンツの側が圧倒的に不足していたか、あるいは知られていなかったため、長い間塩漬けにされていたのです。

J-SHIS Web APIの威力

2012年4月に公開したJ-SHIS Web API¹⁾、気象庁の防災情報XML、自治体のオープンデータなど公的で社会の役に立つデータが次々と公開されはじめています。これらはこうした情報技術分野にとっても光明をもたらすものであると思います。もしゆれ²⁾はこうした事例をいち早く形にしたコンセプト・モデルとなっています。

ビジュアルであることの重要性

もしゆれはAPIで得られた250mメッシュごとのハザード情報から、現在地でどのような被害になるか類推した結果を1つ選んで表示します。結果はイラストと文字が入りますが、文字など無くとも理解できるような、視覚に訴えかける表現を目指しました。ビジュアルを重視する利点は思いのほか大きく、実感を伴うインパクトを与えて実際の対策行動に結びつける効果の他にも、外国人や子どもなどにも理解されるなど、受け手側の幅や多様性が格段に変わりました。



図1 もしゆれ

もしゆれの結果表示

もしゆれの結果表示は多岐にわたります。これらを作るにあたっては、自然災害情報室や他の領域・研究分野の方の協力をいただきながら、過去の事例も参考にして作っていきました。



図2 様々な結果表示



図3 詳細結果表示

もしゆれが問い合わせしているソース元は数値で示されたデータですが、データを情報化し、情報を知識化し、知識を知恵化して意思決定に結びつく形にするという意味で、知を具体化するこうした技法の利活用の検討が、今後の災害と情報の融合分野ではより重要なものになってくると考えています。

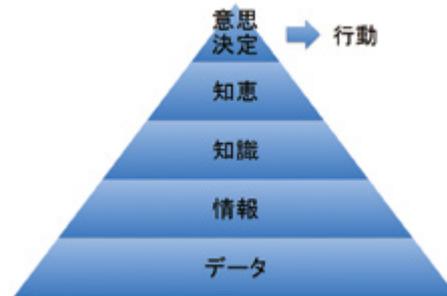


図4 データから意思決定までの長い道のり

自分ゴト化 (ワガコト化) と連携

次の地震による被害について考えたとき、ある想定に頼る限りは、想定外は必ず生まれてきます。もしゆれは、対応しきれない事柄は存在するという、留保付きのリスクの把握であることをいつでも思い出させてくれるアプリです。このアプリを作るにあたって協力いただいた方が地震防災をまさに自分化し、記事を更新してくださっている Facebook ページ^[3]があります。災害に知で備える方法として「測る」「予測する」が挙げられますが、さらに「連携する」も忘れてはならないのかもしれません。

参照



[1] 地震ハザードステーション J-SHIS (Web API)
[http://www.j-shis.bosai.go.jp \(/api-list\)](http://www.j-shis.bosai.go.jp (/api-list))

[2] もしゆれ <http://ifearthquake.bosaiapp.com>

(もしもいまここで大地震の揺れに見舞われたらワタシはどうなる?)

[3] もしゆれフェイスブックページ

<https://www.facebook.com/ifearthquake>